

がんセンターNEWS

Aichi Cancer Center News

第 37 号

平成23年7月発行

発行

愛知県がんセンター

Tel. 052-762-6111(代)

副院長就任のあいさつ

2011年4月より副院長を拝命しました内視鏡部の丹羽康正です。伝統ある当院で重責のある立場になることにつきまして、非常に名誉であるとともに重荷もひしひしと感じています。大学を卒業して28年がたちましたが、医学の進歩や病気の多様性および患者さんの意識の変化には驚くべきものがあります。高齢化社会の到来とともにがん患者さんの増加は特に顕著です。当院は伝統のあるがん専門病院ですので最先端の医療を提供できるように努めていきたいと思っています。

私自身これまで消化管の形態学を研究して診断や治療を行なってきました。研究自体は細かなことに向かうこととなりますが、従来から積み上げられた診断・治療体系は重要であり、一方で病気を持った患者さんと向き合って病気を治すことはさらに大切と思います。今後も県民の皆様の期待に答えられるように患者さんや家族の方に納得していただける医療、がんセンターならではの医療、国内外に発信できる医療を目指して、病院のスタッフとともに頑張っていきたい所存です。どうぞよろしく申し上げます。



副 院 長

丹羽 康正

部長就任のあいさつ

2011年4月より名古屋大学血液・腫瘍内科学より愛知県がんセンター中央病院血液・細胞療法部部長に着任いたしました。血液・細胞療法部は血液がんをはじめとする血液疾患の診療を専門としています。近年薬物療法や造血幹細胞移植の進歩などによって血液がんの治療成績が大きく向上しています。私たちは最新の研究成果に基づく良質で高度な医療を提供するように努めています。またJCOGやJALSGなどの血液がんを対象とする共同研究グループの中核的な施設として新しい治療法の開発に取り組んでいます。さらに治験にも積極的に取り組み新薬の開発に貢献しています。皆様にはこれからもご指導ご支援頂きますようお願い申し上げます。



血液・細胞療法部長

木下 朝博

新任医師の紹介



消化器内科部

今岡 大

2011年4月より島根県立中央病院より参りました。当院で以前に2年間、消化器内科のレジデントとして消化器疾患に関して修練させて頂いており、数年振りの赴任になります。一人でも多くの患者様に質の高いがん治療を提供すると共に、患者様からの視点を忘れず、分かりやすく丁寧な説明を心がけていこうと考えています。



内視鏡部

田中 努

名古屋大学消化器内科から愛知県がんセンター中央病院内視鏡部に着任致しました。内視鏡やレントゲン検査に基づく適切な診断を常に心がけています。治療では、早期がんの内視鏡治療および進行がんの化学療法を行っています。患者さんに最適な治療を提供することを目指します。



頭頸部外科部

鈴木 秀典

2011年4月より名古屋大学医学部附属病院から着任いたしました。頭頸部がんに対する根治性と機能温存を高めるよう、手術や抗がん剤治療等を行ってまいります。さらに、今後のより良質な医療を提供できる治療法の開発をめざし研究していきます。



乳腺科部

澤木 正孝

名古屋大学医学部附属病院より赴任して参りました。乳がんの診療・研究に加え臨床腫瘍医の養成コースを担当してきました。これまでの経験を生かして臨床・研究に励んでいきたいと思ひます。患者さんの個々の病状に合わせてベストの治療が提供できるように取り組みます。



消化器外科部

植村 則久

豊橋市民病院より赴任してまいりました。食道がんの手術を専門としています。病気の状況や患者さんの体力などにより最良と思われる治療方法をわかりやすく説明し、十分ご理解いただいた上で診療をすすめるように努めてまいります。



放射線診断・IVR部

井上 大作

岡山大学、福山市民病院から着任しました。CT・MRI等の画像診断やIVR(画像を見ながらカテーテルや針などを使って行う、体に負担の少ない検査・治療)を専門としています。がん診療において、より正確な診断や安全な治療を提供できるよう努めて参ります。

日本癌学会

第70回学術総会の紹介



第70回日本癌学会学術総会会長
がんセンター研究所長

田島 和雄

日本のがん研究組織を代表する日本癌学会の第70回学術総会が今秋の10月3～4日に名古屋で開催されることになりました。今や日本人の二人に一人はがんになり、一方で、がんの診断/治療技術も著しく向上し、五年生存率も6割を越えようとしております。難治性のがんや再発がんに苦しむ多くの国民がおられることも深刻な問題ですが、まさに、難敵であるがんと共存しながら克服していく時代が到来しており、今回の主題も「がん研究の躍進 - 共存から克服へ、そして未来へ」としました。日本癌学会の役割は、1)がん研究の学術的発展の推進、2)日本のがん対策推進への寄与、3)次世代を支える若手研究者の育成などですが、本学会員は最先端のがん研究情報を相互交換する場として学術総会を位置づけ、一方で、がんの基礎研究から応用研究への進展、しかも診断・治療・予防に役

研究所からの報告

成人T細胞性白血病リンパ腫(ATL)細胞は次々と変化する

遺伝子医療研究部 瀬戸 加大



遺伝子医療研究部
部長

瀬戸 加大

遺伝子医療研究部はリンパ造血器腫瘍(血液細胞のがん)の研究を行っています。リンパ造血器腫瘍には数十に及ぶ病気の種類があり、時に診断が困難なこともあります。また、治療方針も各病型により異なります。その中でも、ATLは治療抵抗性で予後が悪いことが知られています。正常細胞ががんになるには、ATLの場合、HTLV-1ウイルスが感染して起こるとされていますが、ウイルス感染だけではがんにはなりません。その他の異常が必要です(図1)。だいたい、5種類くらいの遺伝子異常が必要と考えられています。最近、ATL患者さんの体内で、がんになった後も、がん細胞の異常が次々と起こって蓄積し、悪性度を増していく可能性が遺伝子医療研究部の研究で明らかになってきました(図2)。

最近、表面マーカーのCCR4を標的とした抗体療法に期待が集まっていますが、ゲノム異常が蓄積してもCCR4マーカーは変わらないので、研究の側面からも新しい治療法に期待できると言えます。

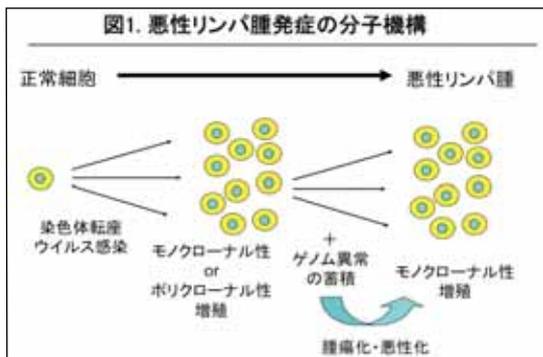


図1. 悪性リンパ腫発症の分子機構

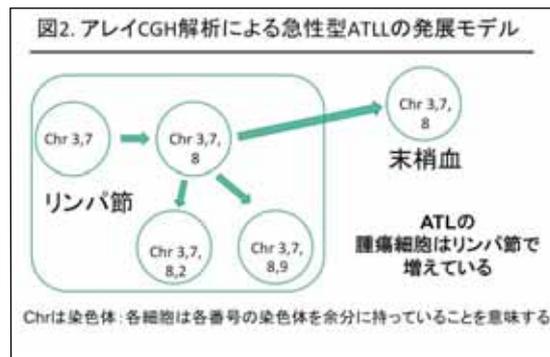


図2. アレイCGH解析による急性型ATLLの発展モデル

立つ国民にわかりやすい研究紹介にも努めております。

さらに、がん研究を通じて日本のみならずアジア諸国との共存を保ちながら「がん」を克服していくため、国際研究活動の推進を目的とし、本学術総会にはアジア諸国から200名以上の演者を迎えるなど、大幅な国際化を図っております。また、第70回の節目をむかえるに当たり、ここまで本学会が進展してきた歴史的軌跡を振り返り、将来への発展の可能性を展望する温古創新のためのイベントも考えております。将来の医科学研究を担う若者向けの教育セミナー、さらに、国民にとって面と向き合って生きるべき身近な病気となってきたがんをより深く認識して頂くため、今後のがん研究の重要性について一般市民と共に考え、討議する場も設けております。



総会ロゴのマスコット(上図)はチームワークでがんを克服しようとする国際アメフトチームを描いたポスターの中心選手で、蹴飛ばすべき難敵がんのボールを持っています。

病院からの報告

消化器外科部の近況

消化器外科部 清水 泰博



消化器外科部 部長

清水 泰博

消化器外科部は、平成23年度より胸部外科から食道グループが編入され、臓器別の4診療グループ(食道、胃、大腸、肝胆膵)となり、スタッフ11名、レジデント6名の構成となりました。5月には清水泰博が部長に就任し、新体制で消化器がん全般の外科診療を行っております。昨年度は食道を含めて772例の手術件数(中央病院全体の手術件数の35%)を行い、その内訳は食道53例、胃227例、大腸332例、肝胆膵160例でした。4診療グループともにJCOGを始めとする多施設の共同臨床試験に積極的に参加し、手術や化学療法のエビデンス作りに取り組んでいます。

食道外科

食道癌に習熟した専任スタッフが根治性の高い手術を行い術後合併症は他施設に比べ少なく、良好な術後成績を得ています。進行した症例でも術前に抗がん剤を使用して根治切除を行っています。(図1)

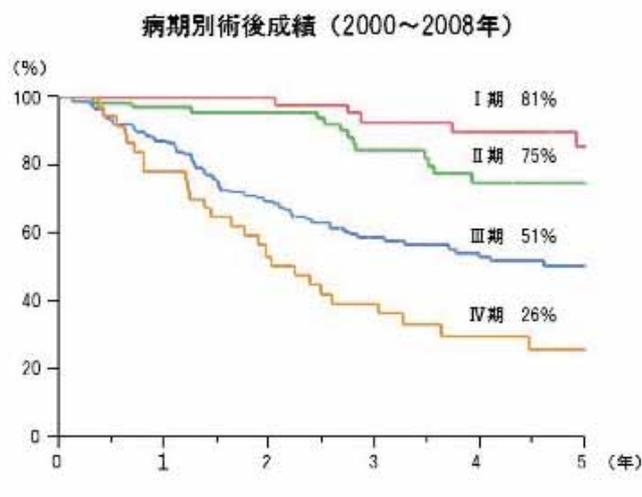


図1 食道癌病期別術後成績(2000~2008年)

呼吸器外科部のご案内

今年4月より今まで「呼吸器外科」と「食道外科」から成り立っていた胸部外科部が、肺がんをはじめとする胸部悪性疾患に取り組む「呼吸器外科部」として新たな出発をしました。国内外に活躍中の光富副院長をトップに、波戸岡、伊藤、福井がスタッフとして年間300例以上の手術を行っています。今年は尾関、小林、富沢、須田、千葉の5名のレジデントが全国から集まり日常診療と研究を通じて研鑽をしています。一人でも多くの肺がん患者さんを笑顔にすることと部内のチームワークを全病院に広げることが信条として、安全な外科治療の遂行と遺伝子研究に基づいた最新の薬物療法、地域連携や緩和ケアまで幅広く肺がん患者さんのニーズに応じた診療に尽力しています。今後のわれわれの活躍にご期待ください!!



呼吸器外科スタッフ一同

胃外科

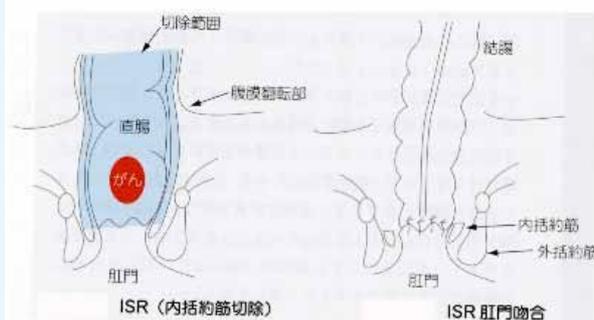
低侵襲手術への取り組みで腹腔鏡下手術が増加しています。腹腔鏡下胃全摘・噴門側胃切除術では新しい吻合法(経口アンビル挿入法)を行っており、開腹手術と全く同じ方法で再建が可能となりました。(図2)



図2 腹腔鏡下胃全摘術 A:手術室外景 B:リンパ節郭清 C:再建(食道-空腸吻合)

大腸外科

最近では肛門から5cm以内に癌があっても肛門を温存する術式(ISR)を試み、2007年からの3年間で永久的な人工肛門が必要になった患者さんは、直腸癌全体でわずかに11%に過ぎませんでした。(図3)



『あなたを守る大腸がんベスト治療』

(愛知県がんセンター中央病院[編] 昭和堂 より引用)

肝胆膵外科

消化器内科、放射線診断部と症例毎に正確な術前診断をして手術適応や手術方法を決定しています。特に膵癌や大腸癌肝転移の切除件数は多く、術後5年生存率は各々26%、53%と他施設に優る成績をあげています。(図4)

治療を希望される方の待機時間を短縮するように努力しており、受診後は1ヵ月前後で手術をしています。いずれのグループもチーム医療を掲げ、合併症や医療過誤を起こしにくいシステム作りに努めています。また本年度から胃がん・大腸がん・肝がんに関しては地域連携パスを導入し、連携病院・診療所の先生とともに術後外来患者さんの経過観察をする予定です。

図3 内肛門括約筋切除 (ISR) による 経肛門吻合術

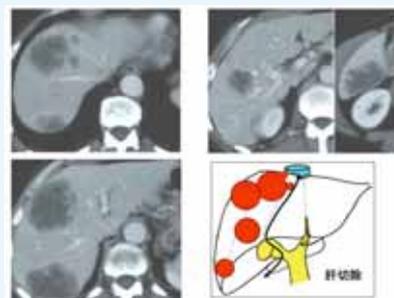


図4 大腸癌多発肝転移(8カ所)肝切除後4年無再発で健在

診療医の紹介 ~ 循環器科部 ~

循環器科では心筋梗塞、狭心症などの心臓病の診療を行っています。致死的な病気が多いのが特徴です。

当センター循環器科の特色として、悪性心膜炎や抗がん剤による心不全などががん治療に伴う心臓病の治療があります。これら治療では解明されていない事が多く、難しい舵取りが要求されます。しかしながら、一般病院15年、がんセンター17年勤務のベテランです。蓄積した貴重な経験が、最良の診療に導いてくれているものと自負しております。



波多野 潔 部長

公開講座「高校生向け 基礎実験体験講座」のお知らせ

例年行なっている愛知県がんセンター研究所主催「高校生向け 基礎実験体験講座」を、今年は8月5日(金)に開催いたします。

本プログラムは高校生の皆さんご自身に生命科学実験を体験していただくもので、今回は培養がん細胞内の様々な構造物を蛍光色素で染め分けレーザー顕微鏡で観察する実験を予定しています。

詳しい募集案内等は愛知県がんセンターホームページに掲載しておりますので、皆さん奮ってご応募ください。



昨年の実験の様子

外来診療案内

受付時間	午前8時30分～11時30分 (自動再来受付機による受付は午前8時からできます。)
休診日	土・日・祝日、年末年始
診療科	消化器内科、呼吸器内科、循環器科、血液・細胞療法科、薬物療法科、頭頸部外科、形成外科、呼吸器外科、乳腺科、消化器外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、婦人科、皮膚科、眼科、放射線診断・IVR科、放射線治療科、緩和ケア科(精神腫瘍科・リンパ浮腫外来・ペインクリニック)、専門外来(禁煙外来)
外来診療担当一覧	毎月1回、月初めに更新しています。 詳しくはホームページをご覧ください
休診情報	お電話またはホームページでご確認ください。
ホームページ	http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/

再診予約制:診察券をお持ちの方は、診察予約をしてください。052-764-2911(直通)午前9時～午後5時(土・日・祝・年末年始を除く)セカンドオピニオン外来は、全科に対応しています。(完全予約制・自由診療)精神腫瘍科及び禁煙外来は、予約のみの対応です。

交通のご案内

公共交通機関のご案内

地下鉄利用 名城線「自由ヶ丘」駅2番出口から徒歩7分

市バス利用 基幹2系統・星丘11系統「千種台中学校」下車徒歩4分

車でのアクセスのご案内

一般道路

本山交差点から北へ5分、平和公園の北西

高速道路

東名高速道路「名古屋IC」から西へ約15分

名古屋高速「四谷出口」から北へ約10分



愛知県がんセンター Tel.(052)762-6111 Fax.(052)764-2963

〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿1番1号 ホームページ <http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/>

がんセンターNEWSは古紙配合再生紙を使用しています。